

実践報告

教育学部施設を利用した地域における子育て広場活動の実践

—親子広場開設年度(2005年度)前期の取り組みと成果—

井口均(長崎大学教育学部)

はじめに

子育て支援の取り組みが、現在は行政機関や様々な関連施設だけでなく、自治会レベルから個人ボランティアまで広がっている。10数年前までは、どちらかといえば子育てと仕事の両立が問題にされ、共働き家庭の母親が主な支援対象となっていた。そのため、保育時間の延長、病児保育、一時保育といった様々な保育支援策をとり、母親の働く権利を保障すると共に子育てへの取り組みを中心的に担ってきたのが保育所なのである。しかし、「国民生活選好度調査」(1997年)で示されたように、その後、育児中の不安は共働き主婦より専業主婦の方がより多く感じている実態が明らかにされるようになってきた。例えば前出の調査では、「育児の自信がなくなる」ことが「よくある」と「時々ある」と回答した専業主婦は合わせて70%であったのに対して、共働き主婦は46.7%であった。その後も、専業主婦として未就園児を抱える母親の孤立化が問題にされ、幼児虐待などにもつながるケースが問題にされ、たとえ在宅で子どもの育児がなされていたとしても、「保育に欠ける」状態があると認識されるようになってきたのである。その結果、母親が働いているか否かに関係なく、どの家庭のどの子どもにも子育て(ち)支援の目が向けられるようになってきた。しかもその支援が多様なレベルで展開されるようになってきたのである。

政府が2003年に成立させた次世代育成支援推進法にもすべての家庭を支援の対象とする視点が明記されている。この支援推進法では、「すべての働きながら子どもを育てている人のため」だけでなく、「子育てをしているすべての家庭のために」、さらに「次世代を育む親となるために」が掲げられており、支援の対象は親になる前の人たちにまで拡大されている。それを実効性あるものにするために、現在は地方自治体や一定規模以上の企業等に対して、数値目標を盛り込んだ実施計画の策定を政府が迫っている段階といえる。ホワイトカラーエグゼンプションなどといった、一部の職種に対して労働時間の規制適用を除外する制度を持ち込もうとする動きもあるが、地方自治体や企業だけでなく、様々な団体から個人まで、それぞれができる支援活動を主体的に担うことが求められている。

今回この文教・親子広場を開設する際にまず考えたことは、孤立しがちな母親たちの「たまり場」的空間が作りたいたいということであった。既に様々な「たまり場」が存在し、有効利用されているかもしれない。その中の1つとして、何らかの機能や役割を果たすことができるのではないかと考えた。本来ならば、場所の利用に関しては何時でも誰でも自由に立ち寄れる(ドロップイン)形式が最もよいことは分かっている

る。しかし、そうしたベストな運営体制ではできないが、不十分な体制であっても何かできることがあるということを、実際に親子を受け入れる中で学生と一緒に考えてみようという試みである。

1. 文教・親子広場開設（2005年4月）に向けた具体的準備

(1) 広場開設までに取り組んだこと

発足までに取り組まねばならない作業課題は山積していた。まず、使用する施設（訓練遊戯実習室、他の隣接室など）の清掃と整備がかなりの時間と労力を要する作業であることは明らかであった。その作業と並行して、室内デザイン（壁面など）のイメージ作り、広場における活動の基本計画案作り（子育てセンターなどでの実際の活動見学も計画）、広場の名称検討、最低限必要な玩具類と絵本の確保、広場活動を支えるボランティア学生の確保、学外者（地域の親子）による学部施設利用申請手続き、広場活動における親子の怪我への対応策、募集要項や宣伝用ポスターの作成、希望受付と参加者決定の手順など、多種多様な作業を学生と共に取り組まねばならなかった。広場開設までの準備活動は、幼児教育選修井口ゼミに所属する5名の3年生と一緒に行った。以下、その中からいくつかの主な取り組みについて述べる。

(2) 施設環境の清掃と整備（2004年10月13日～12月6日）

広場活動の主活動空間となる新館1階の訓練遊戯実習室（64㎡）および隣接する2部屋（いずれも22㎡）の清掃と整備はとりわけ大変な作業であった。その部屋を示したのが図1である。

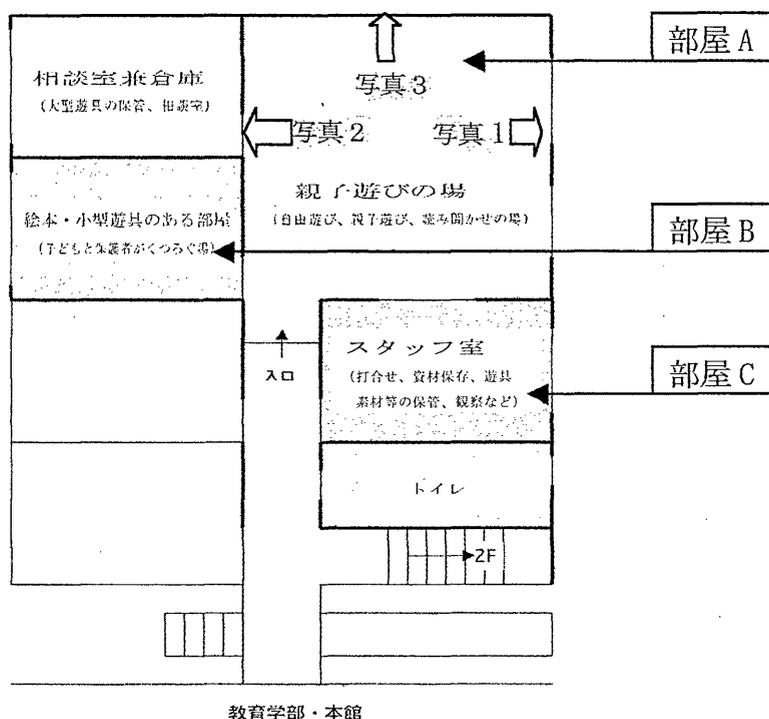


図1 文教・親子広場の実施会場図

実を言うと、長崎大学教育学部に赴任して20年を過ぎたが、この部屋を利用したことは過去に数回しかない。それも10年以上も前のことである。理由は汚いの一言に尽きる。実際に壁のあちこちに黒カビが付着しており、水道の蛇口を回すと茶色い水道水が腐った臭いを放ちながらほとぼり出る。勿論、埃も室内側の窓枠や部屋の隅々に堆積している。訓練遊戯実習室の天井隅に対角線上に設置された、かつて遠隔操作が可能であったと思われるビデオカメラの周辺には埃と蜘蛛の巣が張りついているといった状態である。

3つの部屋の清掃と整理は、後期（2004年10月以降）のゼミ終了後に毎週1時間程度ずつ時間を割いて行ない、12月上旬までに仕上げる事ができた。まず各部屋に放置されたマットや木枠など、また収納棚に押し込まれたままの不要物を片付けた。その後、カビ除去剤の壁紙への塗布とふき取り、部屋AとB（図1参照）の絨毯の洗剤洗いとふき取り、ついでに部屋Aに置かれたピアノの調律を依頼して弾ける状態にし、最後にダニ等の駆除を2度実施した。

(3)各部屋の壁面構成（2005年1月19日～2月上旬）

各部屋の活用法を検討する際は、NPO事業サポートセンターによる『子育て支援環境づくり実践ハンドブック』（2004年）の中で指摘されている、開放空間でのコーナー利用を考え、親子で過ごす空間づくりをイメージした。部屋Aはプレイルームとして主に親と子のそれぞれの交流の場であったり、また親子全員で取り組める遊びを持ち込んだりする場として位置づけ、必要に応じてコーナーを設置する。部屋Bは部屋自体をコーナーに見立て、一人で絵本を読んだり、ごっこ遊びをしたり、一息ついたりできるマルチ機能をもつ場とした。部屋C（図1参照）はスタッフルームとして、ゼミ学生とボランティア学生の控室として、またダンボールや新聞紙といった嵩張る素材をはじめ、色画用紙、絵の具、マジック、ハサミなどを保管する場とした。

次の写真1、写真2、写真3はプレイルームを3つの方向から撮ったものである。学生と協議し、森と丘をイメージしたものである。使用した素材はダンボール、端切れ布、色画用紙などである。

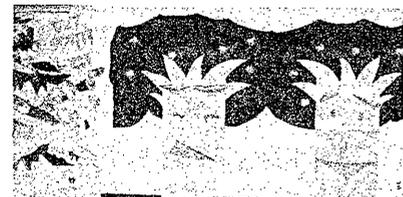
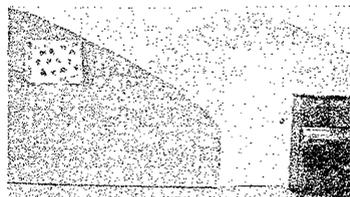
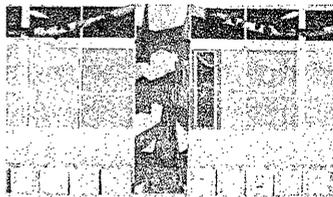


写真1 北側（窓）の装飾

写真2 南側の壁面構成

写真3 西側の壁面構成

(4)活動内容と体制づくりおよび備品類の収集（2005年1月19日～3月下旬）

各部屋の整備と並行して、4月からの発足に間に合わせるために表2、表3にあるような作業を3年ゼミ生と共同で行なった。希望者の受付開始を3月中旬頃にし、4

月 10 日までに参加者を決定することにした。全体統括および各作業の責任者は井口が行ない、準備段階での作業は参加できる学生が 5 名程度と少なかったため、各作業にとりかかる時期（同時並行の場合もあり）をずらしながら全員で取り組んだ。開催直前、3 月末までの作業内容を示したのが表 1 と表 2 である。

表 1 2 月末までの達成及び確認課題

- [保護者への広報関係]
- 配布用チラシの記載事項チェック
- 長崎市広報掲載希望月の締切確認
 - ・上記 2 項目は 2 月初めに送付
- 近隣児童館等への掲示板掲載等の依頼
- [学生スタッフの確保と体制づくり]
- スタッフの人数確保（15 人目標）
- ボランティアスタッフ募集案内の作成と学内掲示
- スタッフカードの作成
- [室内整備および装飾関係]
- プレイルームの壁面構成
- マルチルームの整備
 - ・絵本用書棚、遊具の収納棚など
- [遊具関係]
- 遊具の制作
 - ・2 年生対象の授業でトーマスの家を共同制作
 - ・ダンボールブロックの制作
- 既存の遊具整理
 - ・滑り台の組立て
 - ・積木、ブロック類の整理
 - ・ままごと遊具の整理
- [広場での遊び内容関係]
- 親子遊びの選定
- 意図的に持ち込む遊びの選定
- その他の予想される遊び

表 2 3 月末までの達成及び確認課題

- [各部屋の備品関係]
- プレイルーム
 - ・入口にかける「広場」の看板
 - ・入口の下駄箱
 - ・駐車券入れボックス
 - ・アンケート記入用文具類
 - ・親子の手荷物整理用ボックス
 - ・落書き用ホワイトボードの設置(水性 WII 用マジック)
 - ・親子の名札
- スタッフルーム
 - ・わら半紙、色画用紙の購入
 - ・文具類(マジック、スティック糊、工作用糊、テープ類など)
- マルチルーム
 - ・空調設備(エアコン購入予算がないので寄贈者を探す)
 - ・設置する絵本のリストと借出し先の選定
- [学生スタッフの追加確保]
- スタッフの人数確保（15 人目標）
- [親子受入れに際しての説明文書関係]
- 参加親子への事前配布物
 - ・親子広場の場所案内図
 - ・当日持参物のお知らせ
 - ・自家用車使用の場合の注意事項
 - ・広場活動での事故に対する保険加入書類
- 学生スタッフに対する広場運営体制の具体案づくり
 - ・事前リハーサル-当日-反省会と次回の計画検討のサイクル
 - ・広場活動の企画と運営を可能にする責任体制の明確化

2. 文教・親子広場開設 1 年目前期における具体的取り組み

(1) 前期（春期）- 文教・親子広場「この指とまれ」

前期-文教・親子広場の目的は基本的に 3 点であった。第 1 は大学の施設を利用して、教員・学生と親子がふれ合える場を作るということである。それは地域に開かれた大

学のあり方について、個別の専門領域(乳幼児教育)から具体化を模索する一つの試みであった。従って、そのための足場として利用可能な施設をまず確保することが必要であった。この点については、既に明らかなようにほぼ達成されたと言える。第2は確保された場(施設)を実際に利用して、今後どのような活動が展開できるか、また必要となるかを実際の親子と関わるなかで具体化することであった。この点に関しては、実際に親子を受け入れ、子どもの遊びの観察や広場活動への要望調査を行なうことにより検討することにした。第3は教員と学生にとっては子ども理解と遊び実践の場として、また参加する親にとっては育児ストレス低減の場となり、子どもにとっては自分の遊びが自由にできる楽しい場として、この広場がどの程度機能し得るかを検討することであった。これに関しては、学生スタッフに対する活動記録の提出、あるいは親の交流場面の観察や育児相談への対応などにより検討した。

文教・親子広場の正式名称も「この指とまれ」(以下、親子広場と略)に決まり、初年度の活動を、学生たちの授業が入っていない平日の午前に設定してスタートさせることになった。受け入れる親子を何組にするか、活動期間をどうするかを学生と論議した結果、受け入れの上限を12組とし、できれば10組程度に抑えることにした。理由は、親子広場のメイン会場となるプレイルームの収容能力を考えてのことである。仮に親子が10組参加すれば親子合わせて20名となり、それにボランティア学生全員が加われば35名となる。プレイルームだけで考えると、一人当たり2㎡を割り込んでしまうのである。実際はピアノが置かれており、滑り台などの遊具を設置すれば、さらに狭くなると予想されたためである。

①前期-親子広場の募集内容

募集内容は下記の通りである。これらを記載したポスターを長崎市の広報課および大学に最も近い(約1km程度)にあるM児童センター(子育てセンター)に送付し、参加者を募集した。TV等の活用も検討したが、希望者が定員を超えるとむしろ問題が生じると考えて取り止めた。また参加者受付は予定定員に達した段階で打ち切ることにした。

- ・開催日時：4月第3週～6月第3週の毎週木曜日、10時30分～12時。
- ・参加受入れ対象者：長崎市内に在住しており、2005年4月1日時点で2歳未満の未就園児とその保護者。
- ・受入れ親子数：原則として、申込み順で10組を限度とします。
- ・申込み締切日：予定した定員に達した時点で締め切らせてもらいます。
- ・実施責任者：長崎大学教育学部 乳幼児発達研究室 井口均 (☎819-2388)
- ・広場のボランティアスタッフ：主として、長崎大学教育学部初等教育コース所属の2年生～4年生及び教育学部大学院生のお兄さんとお姉さんたちです。
- ・実施場所：長崎大学教育学部新館1階施設。
- ・活動内容：10:30-皆集まって来ます。(2回目以降、10時頃から開けます)
ホワイトボードにお絵かきしたり、おもちゃで遊んだり、自分の好きな遊びをします。(場所や人に慣れたら、10時頃

までに来て下さい。)

10:45-皆で一緒に遊びをすることもあります。

(それが無い場合は、一人ひとりの遊びを続けます。)

11:30-親子遊び、手遊び、「お返事できるかな」

11:45-読み聞かせ

11:55-片づけ/お知らせ/解散(また来週!)

*毎週、「育児の相談ごと」にも応じます。遠慮なく、スタッフへご連絡下さい。

- ・参加費用：無料。ただし、遊び活動で使用する材料費と傷害保険加入費(希望者のみ)が必要な場合があります。

②前期-親子広場の受付から受入れ親子の確定まで

親子広場への問い合わせと参加申込みの手続きに関する情報提供は混乱を避けるため、井口に一本化して行なった。参加親子の確定までの流れを示したのが次の図2である。長崎市が発行する公報「ながさき」に掲載した募集記事を見て申込みをしてきたケースがほとんどであった。友人関係にある親子が2組あったが、公報を見た母親が友人である母親を誘って申込んだようである。予定した10組を超えてしまったが、事情を聞くと断れなくなり、受入れ数は結果的に13組となってしまった。

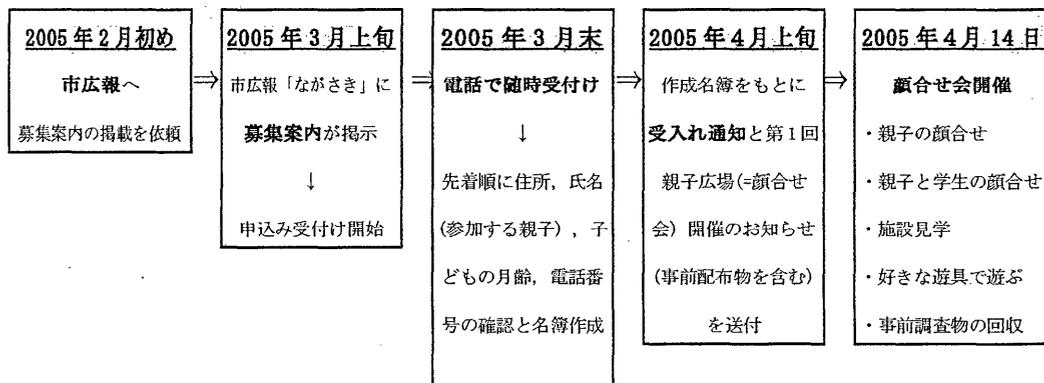


図2 文教・親子広場の参加者募集から第1回広場までの流れ

参加した親子は13組であったが、下の妹も一緒に参加することになり、子どもは14名となった。一緒に来ることになった妹が0歳6か月であったため、最年長の2歳7か月の子どもとは2歳以上の開きがあった。平均年齢は1歳9か月であった。男女別では男児が10名、女児4名で、男児優勢の集団となった。

母親の平均年齢は29歳4か月で、複数の子どもを持つ母親は5名、残りの8名は一人っ子であった。しかし、広場参加中に一人っ子だった3名の母親が出産した。親子広場に参加した主要な動機は、6名が同じ年齢の子どもが家の近くに居ないため、5名が同じ子育て中のお母さんと友達になりたいため、2名が育児の不安を誰かに聞いてもらいたくて、ということであった。

③親子広場の活動を支えるボランティア学生（以下、学生スタッフ）

学内で親子広場を支える学生スタッフを募るため、以下の内容を記した募集案内チラシを教育学部の本館と新館のエレベーター内及び出入り口のドア、それに全学教育事務室の掲示板などに貼らせてもらった。

■活動内容

- ・親と子ども（2歳前後）と一緒にできる遊びを援助！
- ・学生による絵本の読み聞かせや特技を生かした遊びもして欲しい！

■主な活動場所と日時

- ・新館1階のプレイルームがメイン会場！
- ・2005年4月第3週目から毎週1回活動を予定！
- ・打ち合わせや準備時間は可能な範囲で、別の日に設けたい！

■こんな人に来て欲しい

- ・子どもと遊ぶのが好きな方や身体を動かして遊ぶのが好きな方！
- ・ピアノやギターが弾ける方！
- ・絵本が好きな方や部屋の飾りつけが好きな方！
- ・幼児の保育・教育に携わりたい方や何かできることをしたいと思っている方！
- ・来年度（2005年度）2年生になる学生さん！

その結果、教育学部だけでなく工学部（1年生）からも1名の申し込みがあり、3月23日の時点で計22名の学生（工学1年：1名、教育2年：8名、教育3年：5名、教育4年：6名、大学院修士課程家庭科専攻2年：2名）が集まった。途中から、工学部1年生は都合により参加できなくなったが、この中の院生と同じ修士課程に留学生として来ていた2名のオランダ人学生が新たに加わり、結局、23名という大所帯になってしまった。この人数の多さが後に問題となるのである。

第1回学生スタッフの顔合せ会（3/23）では、お互いに自己紹介をした後、親子広場活動の趣旨や内容について説明（井口）を行ない、準備過程での苦労話も伝えた。第2回の顔合せ会（4/7）では、広場に参加する13組の親子のリストを示し、第1回親子広場（4/14）についての打ち合わせを行なった。井口から検討項目のみを指示し、実際の話し合いはゼミ所属の4年生の進行役に任せた。検討事項は以下の責任担当者を決めることであった。

- ・広場活動の目的と活動内容の説明
- ・親子の自己紹介（親子遊びの企画、参加親子の名簿一覧表の配布含む）
- ・学生スタッフの自己紹介（手遊び、学生スタッフの名簿一覧表の配布含む）
- ・親子広場（新館1F）の各部屋の案内と説明
- ・親子広場での日課の過ごし方についての説明
- ・絵本の読み聞かせ（2名）

これらの責任担当者を決めた後、全員で各部屋の安全点検を行ない、設置するテーブルなどの角部分へのクッション材の貼り付けなどを行なった。図書館側から新館1階に入る時のゆるやかなスロープに落下防止の手すりが必要ではないかという意見

が出されたが、担当者を置いて対応することにした。

最後に、自薦・他薦で、前期の親子広場活動を統括する学生の責任者を1名選出してもらい、井口と二人三脚で親子広場の活動原案を企画していくことにした。幸いにゼミに所属する4年生が意思表示をしてくれたお蔭でそれも問題なく決まり、広場活動への人的体制も基本的に整った。次の図3は、1か月間に学生スタッフが行なう企画・運営活動の基本サイクルを示したものである。

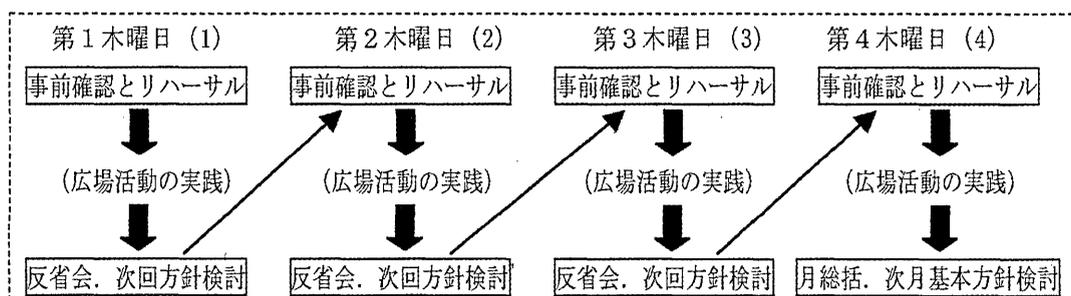


図3 企画・運営活動における事前の基本サイクル

④前期-親子広場活動の取り組み

i) 広場回数及び参加率

前期-親子広場の開催回数は、10回（4月14日、4月26日、5月10日、5月17日、5月24日、6月7日、6月14日、6月21日、6月28日）であった。親子の参加率は毎回全員というわけにはいかなかった。子どもが急に熱を出したり、上のお子さんの学校行事が入ったり、後半は出産もあった。それでも全員揃った日は半数近い。

参加されたお母さん方の話によれば、園庭開放に行けばそれなりに楽しいし、子育てセンターが主催する子育て広場も結構面白いが、この親子広場を選んだ最大の理由は小集団だからということらしい。要するに、多くの子育て支援活動では参加者が多すぎて、親や子ども同士が親しく交わることができないまま終わってしまうことに不満を感じていると言える。大学の施設の狭さが、そうした不満を感じる母親たちにはむしろ有意義な場となっていることを感じた。

ii) 親子広場における活動内容

親子広場の日課について活動の流れをまとめたものが図4である。学生スタッフの活動を中心に、左端に親子の活動があり、右端に教員（井口）の活動を配置している。

学生スタッフはできるだけ子どもの遊びに関わり、子どもが自分の遊びに専念できるようにすることで母親を子どもから引き離すことを心掛けさせた。最初の頃はやはり母親から離れて遊ぶことはなかったが、1か月目頃（4回目の広場）から一人で遊びはじめる子どもが出始めた。それと並行して、母親同士もいくつかのグループが形成され、その中で会話が活発化していった。この現象に関する具体的分析は後期-親子広場において実施することにし、前期では広場活動に対する要望調査を中心に行なった。その内容については後の部分で取り上げる。

《親子の活動》

《学生スタッフの活動》

《教員の活動》

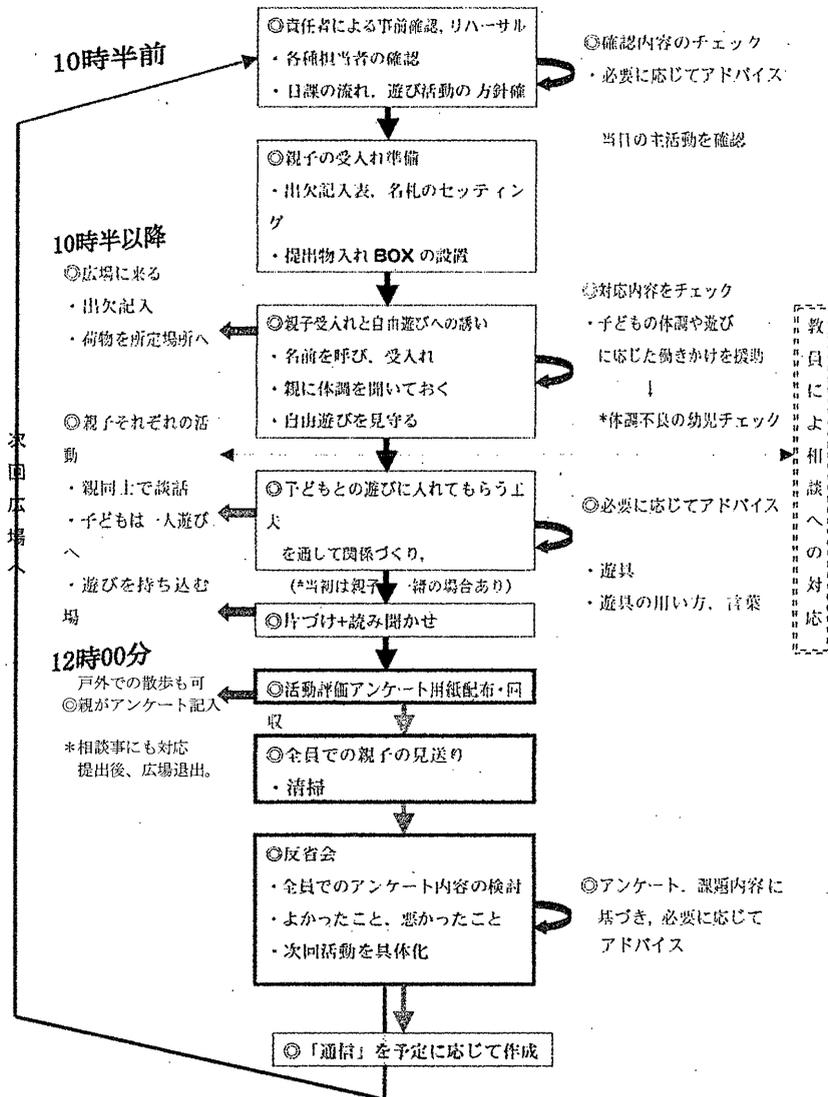


図4 親子、学生スタッフ、教員相互の活動の流れ

ii) 親子広場での遊び内容といくつかの事例

前期-親子広場は、学生のボランティア活動という位置づけで、母親たちの「居場所づくり」を優先させた取り組みである。そのため、広場での学生スタッフの活動は、子どもたちの遊びに入れてもらったり、家庭ではなかなかできない遊びを学生スタッフから持ち込んでもらったりしながら一緒に楽しんだりすることに重点をおいた。少なくとも何らかの専門学習や研究の手段として、あるいは保育理論の実践的応用の場としてみることも極力避けた。どうしたらこの親子広場が親子にとって心地よい場となるかを考えようとしただけである。唯一訓練的視点で、学生スタッフに取り組むよう指示したことは絵本の読み聞かせぐらいである。以下、親子広場の中で観察された子どもの遊びやこちらが持ち込んだ遊びなどを整理しておく。

[観察された子どもたちの主な自発的な遊び]

- ホワイトボードでのなぐり描き
- 滑り台ですべる
- レゴブロックをひたすらつなげる
- 三輪車を乗り回す
- 積み木で積んだり，並べたり
- リカちゃん人形での着せ替えるなど
- ぬいぐるみを抱いて歩き回る
- ボールの投げ合い
- 絵本を読んでもらう
- 段ボール箱に入って押してもらう
- 車を並べたり，動かしたり
- トーマスの家に出たり入ったり（写真4…当時2年生がある授業で製作したもの）



写真4 トーマス機関車をモデルにした家（2005年1月25日完成）

[学生スタッフが持ち込んだ遊び]

- キャンパス内散歩(教育学部玄関前…全学教育棟横の池…おもやい広場が基本)
…猫、鯉，草花，蟻，ダンゴ虫などに出会う。
- 新聞ビリビリ（新聞紙を思いきり，ひたすら破る）
…細かくなった新聞紙でプールやお風呂をイメージ。
- 小麦粘土（市販の小麦粉，水，色紅等，サラダ油を使用，手触りがよい）
…伸ばしたり，こね回したり，ちぎったり，丸めたり。

[学生スタッフによる手遊び・歌遊びなど] …主に読み聞かせの前

- げんこつ山のたぬきさん
- おへんじ できるかな
- トン トン トン ひげじいさん
- 1のゆび とうさん
- こぶ たぬ きつ ねこ
- ポキポキダンス
- ちょちょち あわわ
- むすんで ひらいて

[絵本の読み聞かせ]

- 学生スタッフが読み聞かせで用いた絵本は以下のもの（作者名等は省略）

- ・たべたのだあれ：文化出版
- ・いちにのさんぼ：アリス
- ・ねないこだれだ：福音館
- ・こぐまちゃんのうんてんしゅ：こぐま社
- ・はらぺこあおむし：福音館
- ・まるとまる：北隆館
- ・あーんあん：福音館
- ・はけたよはけたよ：偕成社
- ・いないばあ：童心社
- ・じゃあじゃあびりびり：福音館
- ・いいおかお：童心社
- ・ふうせんねこ

- ・三びきのやぎのがらがらどん：福音館
- ・どうぶつのおかあさん：福音館
- ・もこ もこもこ：文研出版
- ・どうぶつのおやこ：福音館
- ・ねずみくんのチョッキ：福音館
- ・おおきなかぶ：福音館

次の表3と表4は、4月28日と5月26日の広場の様子を時間の流れと活動の流れを事例として示したものである。

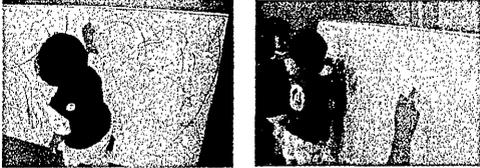
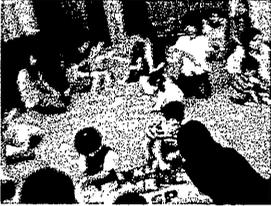
表3 4月28日の広場活動の様子

春季親子広場

2005 4. 28(3)

時間	迎え+挨拶	自由遊び	手遊び	親子遊び	自由・設定遊び	読み聞かせ	お帰り
10:30~	◎皆さんが集まるまで自由な時間	*広場への入口前から、泣き出す子どももまだいる。 *親子遊びを始めるまで、前回同様、各自好きな場所で自由に遊ぶ。	<ul style="list-style-type: none"> ・三輪車 ・ぬいぐるみ ・ブロック ・家から持参した人形 ・滑り台 ・トーマスの汽車でも遊びはじめる 	◎空間設定は、部屋の周辺に遊具を置くことでコーナー的に。			
10:45~	◎手遊び「チョコチョコキ」「ずっとおあいこ」	*母親だけが学生指導者と一緒に遊ぶ傾向					
11:00~	◎親子遊び「ボキボキダンス」	*母親が手を引いて何とか子どもを参加させている。 *子どもは、やはり動作より学生自身に注目(知らない人)。					
11:15~	◎自由遊び…天气が良いので図書館の庭で外遊び	*草をむしったり、木の実を「ぶどう」に見たてたり。 *図書館のベランダを走って行き来して遊ぶ子もいる。 *子どもと母親が一对一でくっつき、子ども同士の交わりはまだ少ない。 *段ボールじゅうたんで、ブロック遊び。					
11:50~	◎絵本読み聞かせ…「おんなじ、おんなじ」「お風呂でちゃぶちゃぶ」「にんじん」						
12:10							
12:10:00	◎片づけ、お帰り	*入構書の提出をお願い *母親たちと一緒に子どもも手伝う *感想の記入をお願い					

表4 5月26日の広場活動の様子

時間	迎え+挨拶	自由遊び	手遊び	親子遊び	自由・設定遊び	読み聞かせ	お帰り
10:00～		◎皆さんが集まるまで自由な時間					
		*学生が入り口で待ち、一緒に入室することが順調に進行。 *10時前から入室する母子も出てきている。					
		*母子と一緒にいるのは入室して10数分間だけで、すぐ自分で遊びはじめる傾向有り。 *ただ、何人かは離れられない場合がある(例えば、ユージン)					
		・ホワイトボードでのお絵描きは活発					
							
		・マルチルームでのままごとの遊びやプレイルームでのブロック遊びが活発					
							
10:50～	◎お返事できるかな!?						
11:10～	◎手遊び/親子遊び						
							
11:30～	◎自由・設定遊び…「小麦粘土」遊び						
		*1回目は、粘土自体を楽しむ……色付けなし、道具をほとんど使わず、こねて遊ぶ。 ・事前に粘土づくり ・敷物準備					
							
12:05～	◎片づけ ◎絵本読み聞かせ						
12:30	◎お帰り						
		*早めに入構書を配布。 *読み聞かせが終わっても帰ろうとせず、母親同士がおしゃべりする傾向が当たり前。					

3. 2005年度 前期-親子広場の活動成果と課題

(1) 広場アンケート

①親子広場と母親同士の関係づくり

前期の親子広場が終了する直前(6月2日)に、参加した母親に回答してもらった。「参加できる親子の数はどれくらいがいいですか」については、自分たちが実際に体験した13組を5名の母親が選んだ。それと同じ5名が10組を選んだ。残りの母親は分からないであった。

今回の広場で問題にした母親同士の交流について、「何人のお母さんとじっくり話せましたか」を聞いた結果、最も多かったのは8人～9人で4名、次に多かったのは4

人～5人とした2名、あとは、全員と話せた方と10人～11人の方が1名ずつであった。

また母親から直接聞いた話ではあるが、広場の終盤にはお互いの携帯アドレスを交換し合うようになり、この親子広場以外の場でも一緒に行動したり、生活情報を交換し合う関係がほぼ全員の中ででき上がっていることが分かった。実際に、終了後はどうするのか聞いてみたところ、あるお母さんから、月1回でよいか親子広場の施設を利用してもらえないでしょうかとの申し出があった。8名程の母親たちが自分たちでこのまま広場を続けたいと考えていたようである。

実は母親間の交流をどうにかするために特別に何かをしたことはなかった。にもかかわらず、こうした結果が生じたことは、間接的ながら子どもが安心して遊べる空間をつくることで、母親同士の交流が自然と深まっていく場合があるという可能性を示したものと考えている。

②母親が親子広場に求める活動

これもアンケートで「親子広場で取り組んで欲しい活動は何ですか（複数化）」に回答してもらったところ、手遊びが10名、外遊びが9名と最も多かった。これに続いて、8名が親子遊びと絵本の読み聞かせを選んだ。以外にも、簡単な誕生会や意図的に持ち込む遊びを選ぶ母親は少なく、どちらも3名しか選ばなかった。水遊びや泥んこ遊びにいたっては1名のみであった。この結果については、子どもに対する見方として、乳幼児期に大切な遊びとは何かについて親の理解を深めてもらう必要があると感じた。

(2) 学生スタッフとの関わりを通して

学生スタッフによる毎回の活動準備と当日の広場活動で見せてくれたバイタリテイには正直感心した。子ども好きの学生が集まったということも関係しているのであろうか、広場活動を本当に楽しんで取り組んでいることがその表情や子どもとやり取りする姿に見られた。

一方で、今回の学生スタッフ体制を見直す必要性もいくつかの点で感じられた。第1は人数である。狭いプレイルームに全員が入ったのでは身動きがとれないのである。途中で交代制や待機するやり方を導入したが、必ずしも有効ではなかった。毎回参加したいという気持ちが強いほど、参加できないことへのつまらなさが募ったのか、途中から参加しなくなった学生が数名いる。その点で学生スタッフの集団規模を検討し直す必要がある。

また、準備場面とは逆に反省場面での参加率は必ずしも高いものではなかった。子どもの遊び傾向などに関する記録資料の提出率なども、著しく低い状態であった。広場活動をより充実したものに改善していく上でどのような資料が必要かを検討する必要がある。

本学部での子育て(ち)支援の存在価値を何に求めるべきであろうか。1つには、小規模のよさにどのような付加価値をつけられるかという点にあることが、今回の経験によって明らかにされたことである。つまり、少数の親子との広場活動だからこそできる子育て支援の中身は何か。学生スタッフの体制づくりのあり方、遊び環境の再検討、ある

いは他の子育て支援団体などとの連携体制づくり等も視野に入れながら、小規模な学
内子育て支援だからこそできる親子広場を構築していく必要がある、

参考資料

NPO事業サポートセンター『子育て支援環境づくり実践ハンドブック』 2004年
内閣府 「国民生活選好度調査」 997年